

埤雅の研究・其七 穢草篇(3)

加納 喜光／野口 大輔

【荷】

荷は総名なり。華葉等の名、衆の義を具ふ。故に知らざるを以て問ひを為す、之を荷と謂ふなり。昔人の正名百物是れ有るかな。故に曰く、萬物理を成す有るも説かざるなり。郭璞以為へらく、「芙蕖⁽¹⁾は一名芙蓉⁽¹⁾」と。『説文』を按ずるに、「未だ発せざるを菡萏⁽²⁾と為し、已に発するを芙蓉と為す⁽²⁾」と。芙蓉は華の号なり。蓋し亦た通じて芙蕖と曰ふ。『毛詩伝』に云ふ、「荷は芙蕖なり⁽³⁾」と。其の華は菡萏なり。許慎以為へらく、其の華を芙蓉と曰ふ。其の秀を菡萏と曰ふ。其の実を蓮と曰ふ。蓮の茂れるを華と曰ふ。今、其の的中、青有りて薏と為す。皆、両牙を倒生す。一は菱荷と成り、一は薄荷と成る。又、一牙を生ずるを華と為す。薄荷は水に帖して薄荷を生ずる者なり。菱荷は薄荷無く荷を巻くなり。華と偶生す。水上に出でて亭亭たること繖の如き者是れなり。亦た或は之を距荷と謂ふ。薄荷一本、其の支旁行するを蒲と為す。節、一華一葉を生ず。『詩』に曰く、「蒲と荷有り⁽⁵⁾」と。蓋し荷は善く傾⁽¹¹⁾欹す。蒲は骨幹なくして柔徒なり。『字説』に曰く、蒲は水に蔽す。其れ自ら卑に処り、加ふる所無し。其の与に汚す所、潔白自若、中に空有り。偶せずんば生ぜず。此の如きは以て物を偶すべし。茄は枝の附する無

く、泥の汚すこと能はず、水の没すること能はず。挺出して立つ。此の如きは以て物を加ふるべし。蓮は既に以て自ら日⁽¹¹⁾有り。また会して属す。此の如きは以て物を連ぬるべし。菡萏の実、旨の若し。昏昕に随ひて闔闔す。蓮は根を假りて以て立ちて、薄荷の偶する所有るが如くならず。茎を假りて以て出でて、茄の加ふる所有るが如くならず。華を假りて以て生じて、蓮の連ぬる所有るが如くならず。菡萏の菡萏有るや、此の如きは遐と謂ふべし。夫れ物を函する者は吐に終はる。物を連ぬる者は散に終はる。物を偶する者は或は之を析す。物を加ふるは亦た常と為すべからず。故に遐は此に在りて彼に在らざるなり。密は無用に退蔵し、而も用ふべく見るべき者、これに本づく。此の如きは密と謂ふべし。此の衆美を合すれば、則ち以て物を何すべし、以て夫と為すべし、以て渠と為すべし。故に曰く、荷は芙蕖なりと。荷は物を何するを以て義と為す。故に負荷の字に通ず。

【校記】

(i) 四庫全書本、芙蕖に作る。『説文解字』、芙蕖に作る。(ii) 五雅本、頃に作る。(iii) 五雅本、白に作る。

【注釈】

- (1) 『爾雅』 枳草。
- (2) 『説文解字』 一篇下の箇の項。
- (3) 『毛伝』 國風・陳風・澤陂の毛伝。
- (4) 『説文解字』 一篇下。文章は完全には一致しない。
- (5) 『詩経』 國風・陳風・澤陂の第一スタンザ。
- (6) 宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。

【考察】

荷はハス (*Nelumbo nucifera*) である。ハス属にはハスとキバナハス (*N. lutea*) の二種があり、園芸品種が多い。

この項ではハスの各部位の名前についてまとめられている。『爾雅』と『説文解字』の記述を比較してみると、荷の定義が相違していることがわかる(表)。『爾雅』では荷をハスの総名とし、ハスの葉を蓮とする。一方『説文解字』では、ハスの葉を荷と定義している。

段玉裁『説文解字注』は『爾雅』の「其葉蓮」の句について、「玉裁按、無者是也」としている。『埤雅』は王安石『字説』の見解を採用して荷を総名とし、蓮を会意により説明するが、記述は抽象的である。ただ荷と蓮は音通するから、ハスの葉の意味で蓮の字を当てたのかもしれない。なお現在の植物学用語では、ここでいう茎、根はそれぞれ葉柄、地下茎となる。

「芙蓉」というと、ハスだけではなくフヨウ(漢名、木芙蓉 *Hibiscus mutabilis*) も指す。その由来について、李時珍は「此花豔如荷花、故有芙蓉木蓮之名」という(『本草綱目』木芙蓉・枳名)。フヨウ

の花は淡紅色で単体雄蕊が多数あるのが特徴である。雄蕊が多数あるということがハスの花を連想させたのであろうか。いつ頃から「芙蓉」がフヨウを指すようになったかは定かではないが、宋の葉夢得撰『石林燕語』には、「芙蓉有二種、出於水者、謂之草芙蓉、出於陸者、謂之木芙蓉、即木蓮也」とある。(野口)

		『爾雅』	『説文解字』
総名	荷・芙蓉	芙蓉	
華	菡萏	菡萏・芙蓉	
実	蓮	蓮	
茎	茄	茄	
葉	蓮	荷	
本	密	密	
根	藕	藕	

【函苞】

『爾雅』に曰く、「其の華は菡萏、其の実は蓮」と。蓋し萼を芙蓉と曰ひ、秀を菡萏と曰ひ、暢茂を華と曰ふ。『古今註』に曰く、「芙蓉、一名荷華。華の最も秀異なる者なり。大なる者は華、百葉に至る」と。然らば則ち華は亦た之を芙蓉と謂ふ。『楚辭』の所謂「芙

蓉を木末に攀ぐ⁽³⁾とは、蓋し此を言ふなり。凡そ物は皆、華を先にし実を後にす。独り此れ華果齊しく生ず。故に西域の書、多く此を言ふ。『詩』に曰く、「蒲と荷有り」「蒲と蘭有り」「蒲と菡萏有り⁽⁴⁾」と。荷は其の質の柔なるを言ふ。蘭は其の気の芳なるを言ふ。菡萏は其の色の美なるを言ふ。『拾遺記』に曰く、「昆流素蓮、一房百子、冬を凌ぎて茂る⁽⁵⁾」と。王文公曰く、蓮華は色有り、香有り。日光を得て乃ち開敷す。卑湿淤泥に生じ、高原陸地に生ぜず。水に生ずと雖も水は没すること能はず。淤泥⁽¹⁾に在ると雖も泥は汚すこと能はず。即ち華時に実有り。然るに華事始まれば則ち実隠れ、華事已むれば則ち実現る。実は黄に始まり玄に終はる。而して莖葉緑にして葉始めて生ず。乃ち微赤有り。実は既に能く根を生ず。根は又た能く実を生ず。実は一のみ。根は則ち量無し。一と無量、互相生起す。其の根を蒲と曰ふ。常に偶して生ず。其の中は本と為す。華実出づる所。薄白く空有り。之を食らへば心飲ぶ。本実黒有り。然れども其の生起は緑と為し、黄と為し、玄と為し、白と為し、青と為し、赤と為す。而して黒有る無し、見る無し、用ふる無し。而して見る有り、用ふる有るは、皆因りて其の名を出だして密と曰ひ、密に退蔵するの故を以てなり。

〔校記〕
(i) 五雅本、於泥に作る。

〔注釈〕

- (1) 『爾雅』 積草。
- (2) 『古今註』 草木第六。原文は「花大なる者は百葉に至る」となっている。
- (3) 『楚辭』 九歌第二・湘君。
- (4) 『詩經』 國風・陳風・澤陂の第一〜三スタンザ。
- (5) 『拾遺記』 周穆王に「素蓮者、一房百子、凌冬而茂」とある。
- (6) 『字說』の引用と思われるが未詳。

〔考察〕

菡萏はハスの花である。ハスは夏に長い葉柄の先に紅、淡紅、白色などの花をつける。萼片四、花弁・雄蕊は多数、花床は蜂の巢状に穴がありそれぞれ雌蕊が入っている。古くは和名をハチスといつた。

ハスの実は食用とする。またハスの種子を蓮子といい、薬や食品に用いる。ハスの種子中の幼葉や胚根は蓮子心と呼び、Lieninine、Isoliensinine、Necrineなどのアルカロイドを含み、降圧作用などがある（『新編中薬志』）。（野口）

〔藕〕

『爾雅』に曰く、「其の本は菹、其の根は藕⁽¹⁾」と。蓋し莖の下白く、藕の泥中に在る者は菹と曰ふ。藕は偶生し、又た善く泥を耕し、引きて長し。故に藕の文、藕⁽¹⁾に従ふ。之に名づけて亦た藕⁽¹⁾と曰ふ。今江左、池を穿ちて取りて汲むも、藕を植ふること欲せず。藕の善く泥を耕し、池を壊すを以てなり。俗に云ふ。藕の生ずるは月に応ず。月に一節を生ず。閏には輒ち一を益す。今芋に十二

子有りて衛と為す。里俗に以て月に応ずるの數と為す。『説文』に曰く、「大葉実根は人を駭かす。故に之を芋と謂ふ」と。旧説に、赤箭根、十二有りて衛と為すこと芋の如し。風有りて動かず、風無くして自ら揺る。亦た其の類なり。『趙辟公雜記』に曰く、「藕は能く移り、鯉は能く飛び、亀は能く守る」と。凡そ芙蕖の藕を行くは竹の鞭を行くが如し。節は一葉一華を生ず。華葉は常に偶生す。故に之を藕と謂ふ。又た華初めて子を箸し、首顧下に在り。之を久しくして其の房、倒垂す。首、更に上に在り。

〔校記〕

(i) 五雅本、偶に作る。(ii) 五雅本、偶に作る。(iii) 五雅本、芙蓉に作る。

〔注釈〕

- (1) 『爾雅』 枳草。
- (2) 『説文解字注』 一篇下・艸部・荷の注。芋の字を荷に作る。
- (3) 『趙辟公雜記』 現存しない。

〔考察〕

藕はハスの地下茎である。莖とは地下茎のうち、葉柄・花柄の出る部分を指しているのであろう。『箋注倭名類聚抄』によると、莖には「波知須之波比」、或は「波知須之波比斐」という和名が当てられている。

ハスの地下茎には空洞があるが、これは浮き袋の役割を果たして

いる。

ここではハスの地下茎が広がりやすいことを述べている。秋に収穫し食用とするが、繁殖力の強さから植えたがらなかつたというのは本当であろうか。(野口)

〔茶〕

茶は苦菜なり。苦菜は寒秋に生じ、冬を経て、春を歴る。夏至りて乃ち秀づ。月令に、「孟夏に苦菜秀づ」と。即ち此れ是なり。此の草、冬を凌ぎて凋(1)まず。故に一名游冬。凡そ此れ則ち四時を以て名を制するなり。『顔氏家訓』に曰く、「茶葉は苦苴に似て細し。之を断てば白汁有り。花は黄にして菊に似たり」と。『詩』に曰く、「其の東門を出づれば、女有りて雲の如し」、「其の闔閭を出づれば、女有りて茶の如し」と。雲は蓋し盛んなるを言ひ、茶は蓋し繁なるを言ふなり。『伝』に曰く、「秦綱は秋茶より密なり」と。『詩』に曰く、「萑(2)茶は飴の如し」と。萑(2)は毒、茶は苦。故に飴の如しと言ふ。以て風土の善なるを著(3)す。『国語』に曰く、「鳩を酒に實く。萑(4)を肉に實く」と。『詩』に曰く、「誰が謂はん、茶は苦しと。其の甘きこと齋の如し」と。蓋し其の事、又た苦なるを言ふなり。『礼』に曰く、「昏姻の礼廢るれば則ち夫婦の道苦にして、淫辟の罪多し」と(5)。其れ此の謂ひか。

〔校記〕

(i) 四庫全書本、彫に作る。五雅本に従う。(ii) 四庫全書本、萑に

作る。五雅本に従う。(iii)五雅本、箸に作る。

〔注釈〕

- (1) 『礼記』月令。
- (2) 『顔氏家訓』書證第十七。
- (3) 『詩経』國風・鄭風・出其東門の第一、二スタンザ。
- (4) 『旧唐書』志・刑法に「是以秦氏網密秋茶」とある。
- (5) 『詩経』大雅・文王之什・蘇の第三スタンザ。
- (6) 『国語』晉語二。
- (7) 『詩経』邶風・谷風の第二スタンザ。
- (8) 『礼記』経解。

〔考察〕

『詩経植物図鑑』では、『詩経』の茶は①「幽風・七月」では苦菜(ノゲシ *Sonchus oleraceus*)、②「周頌・良耜」では陸生植物、③「鄭風・出其東門」や「幽風・鷓鴣」では蘆葦(ヨシのなかま)や白茅(チガヤ)の花序の三種類に分類している。これは宋・嚴粲撰『詩緝』などに見られる解釈である。

『埤雅』では『顔氏家訓』の記述を茶の特徴として引いているが、これはキク科タンポポ亜科の特徴と一致する。タンポポ亜科の植物は連合乳管が発達し、植物体を折ると乳液が出る。またキク科植物は集合花があたかも一つの花のように見える「集合花」を形成する。『埤雅』では『詩経』中の茶は全てノゲシなどのタンポポ亜科の植物とし、チガヤの花序などとは解釈していない。

『本草綱目』では貝母や敗醬(オミナエシ)、龍葵の別名として苦

菜を挙げている。敗醬、苦菜の名は科を越えて名前が混乱しているため、『中華人民共和国薬典』では、キク科植物によるものを北敗醬としてオミナエシ科のものと区別した。『新編中薬志』北敗醬の項には、「因為北方地区民間常把苣荬菜等多种菊科植物称作“苦菜”とあり、多種のキク科植物を「苦菜」と呼んでいたことがわかる。以下、苦菜や敗醬草と呼ばれるキク科植物群の可能性を表に示す(『新編中薬志』より)。

また茶がチガヤやヨシの類を指すということについては水上静夫著『中国古代植物学の研究』(角川書店)で詳しい考証が為されている。水上氏によれば、茶には家屋建築資材の草の意味があるということである。

茶は『埤雅』のように一種の植物に同定できるものではないように、広義には表に挙げたタンポポ亜科の植物とオミナエシの仲間、陸生植物、チガヤ・ヨシなどを指していると考えられる。(野口)

和名	漢名	学名
ハチジョウナ	苣荬菜	<i>Sonchus arvensis</i>
ノゲシ	苦苣菜	<i>S. oleraceus</i>
	乳苣	<i>Mulgedium tataricum</i>
タカサゴソウの母種	中華小苦苣	<i>Ixeridium chinensis</i>
	抱茎小苦苣	<i>I. sonchifolium</i>

【葵】

『齊民要術』に曰く、「今世、葵に紫莖と白莖の二種有り。春必ず畦に種え水を澆ぐ。而して冬種うる者は、雪有り、風に従ひて飛び去らしむ勿れ。毎雪輒ち一たび之を勞す。雪を勞するは、地をして澤を保たしむ。葉は又た蟲ばまず。招するに必ず露の解くるを待つ。収むるに必ず霜の降るを待つ。傷つくこと晚ければ則ち黃爛し、傷つくこと早くば則ち黒澁するなり」と。⁽¹⁾『詩』に曰く、「七月に葵及び菽を烹る」とは即ち此れ是なり。『左伝』に曰く、「鮑莊子の知、葵に及ばず。葵、猶ほ能く其の足を衛る」と。⁽²⁾今、葵心、日光の転ずる所に随ひ、輒ち低く其の根を覆ふは、知に似たり。孔子曰く、「禾生じて穂を垂れ、根に向かふは、本を忘れざるなり」と。⁽³⁾蓋し禾の根に向かふは仁なり。葵の足を衛るは知なり。仁は以て之を衛る所、知は以て之を揜る所、故に葵は揜なり。『字説』に曰く、「草なり。能く日の嚮ふを揜る。故に又た揜と訓ず」と。⁽⁴⁾『本草』に曰く、葵は「白菜の主と為す」と。⁽⁵⁾豈に亦た此を以てせんか。『爾雅』に曰く、「終葵は藜露」と。⁽⁶⁾終葵、一名藜露。此れ又た葵の一種なり。蔓生し、葉円くして厚し。故に『周官』に曰く、「大圭長さ三尺、杼上は終葵首」と。⁽⁷⁾義、諸を此に取るなり。『説文』に云ふ、「齊、之を終葵と謂ふ」と。⁽⁸⁾終葵は杼上に於いて、其の首を円広にするを謂ふ。説者以為へらく、即ち琕は是なり。按ずるに『礼』に曰く、「天子、琕を搯むは天下を方正にす」と。⁽⁹⁾蓋し大圭終葵首とは全く異なる。『相玉書』に曰く、「琕玉六寸。明、自ら照る」と。今、大圭長さ三尺。琕に非ざるを知る。『周官』に

曰く、「王、大圭を搯み、鎮圭を執る」と。⁽¹⁰⁾又曰く、「冒四寸を執りて、以て諸侯を朝す」と。⁽¹¹⁾蓋し王、鎮圭を執れば、則ち大圭を搯む。天子、冒を執れば、則ち琕を搯む。故に鎮圭は尺有二寸。大圭の長さは三尺。冒圭は四寸。琕は六寸なり。大圭は円にして仁。故に鎮に於いて之を搯む。鎮の義の故なり。琕は方に義を以てす。故に冒に於いて之を搯む。仁を冒す故なり。

〔校記〕

(i) 五雅本、玉の字を王に作る。(ii) 五雅本、於の字を謂に作る。

〔注釈〕

- (1) 陸佃による『齊民要術』種葵第十七の摘要である。
- (2) 『詩経』 国風・邶風・七月の第六スタンザ。
- (3) 『春秋左氏伝』 成公。
- (4) 未詳。『論語』には見えない。
- (5) 『字説』 宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。
- (6) 『重修政和经史証類備用本草』の引く『名医別録』に「葉為白菜主」とある。
- (7) 『爾雅』 枳草。
- (8) 『周礼』 玉人。
- (9) 今本『説文解字』には見えない。
- (10) 『礼記』 玉藻。
- (11) 『相玉書』 未詳。
- (12) 『周礼』 春官宗伯・典瑞。
- (13) 『周礼』 冬官考工記・玉人。

〔考察〕

葵はフユアオイ(冬葵、野葵 *Maha verticillata*) に同定される。二年

生の草本で高さは六〇〜九〇センチメートル、葉は腎形から円形で掌状、五〜七深裂である。現在の日本では人家にゼニアオイ(M. *vestris* L. var. *mauritanica* Mill.)が観賞用に植えられているが、フユアオイは花が小さく観賞用には適さないため植えられることはない。薬用植物園や、日本の海岸に野生化したフユアオイがまれにある程度である。

本草書には「百菜の主と為す」とあり上品に分類され、『証類本草』では菜部に置かれるが、明・李時珍は「古者葵為五菜之主、今不復食之。故移入此」といい、『本草綱目』では草類に分類した。しかし、清・吳其濬撰『植物名実図考』の記述によると、まだ葵を食用とする習慣は残っていたようで「以一人所未知而曰今人皆不知、以一人所未食而今人皆不食、抑何果於自信耶」というほどである。現代でも『中国高等植物図鑑』に「嫩苗可作蔬菜」とあり、食用とすることがわかる。『植物名実図考』によるとフユアオイの葉の味は藿(マメの葉)に似ているという。

植物が光の方向へ向かう屈性を向日性という。向日性の植物は非常に多いが、フユアオイに関する研究論文は見つけることができなかった。

日本では葵の字は、フタバアオイ(カモアオイ *Azium caulescens*)などのウマノスズクサ科の植物にも当てられている。この由来について狩谷掖齋は、「其の葉、葵の葉に似、故に古人誤りて葵を以て阿布比に充つ。『新撰字鏡』の訓ずる所、是れに当たる」という(『箋注倭名類聚抄』)。フタバアオイは京都の加茂神社で五月に行わ

れる「あおい祭」で用いられるため、カモアオイともいう。徳川家の家紋がフタバアオイを三葉にしたものであるのは加茂神社信仰による(牧野富太郎『南葵』とは本字当て字の組合せ)『植物研究雑誌六卷二号』。(野口)

【藍】

『爾雅』に曰く、「葢は馬藍」と。染草なり。即ち今の大葉冬藍の澱を為す者、是れなり。『月令』に、「仲夏に民をして艾藍以て染むること無からしむ」と。鄭氏云ふ、「長気を傷るが為なり」と。然らば則ち艾藍は夏に於いてするは、先王の法、焉を禁ず。字を制すること監に从ふは此を以ての故なり。是れ由り之を觀れば、先賢の云ふ所、冰を蔵するは霜無き所以。而して原蠶、其の馬を害するを惡むは、豈に虚言ならんや。『齊民要術』に以為へらく、「藍を種うるは一に葵の法に同じ。藍は三葉、之を澆ぎ、薊りて治めて浄ならしむ。五月中新雨の後、即ち之を拔栽す」と。故に『夏小正』に、「五月蘭を蓄ふ。藍蓼を灌沐す」。灌は澆灌なり。沐は剥沐なり。『詩』に曰く、「終朝緑を采る。一躬に盈たず」「終朝、藍を采る。一檐に盈たず」と。藍緑は得易きの物なり。今、憂思を以て之を貳にす。故に終朝、采掇すると雖も、緑、一躬に盈たず、藍、一檐に盈たざるなり。藍は緑より大なり。又た其の畦、植うること鱗の如し。則ち其の之を采りて檐に盈たすは易し。故に『詩』に以て後ると為す。緑は以て黄に染むべし。藍は以て青に染むべし。則ち皆、婦人、飾を致すの物なり。故に『詩』、正に之を言

ふ。『荀子』に曰く、「青は藍より出でて藍より青し。冰は水之を為して水より寒し」と。説者以為へらく、冰藍は皆学に喩ふ。則ち才、其の本性を過ぐ。学、以て已むべからざるを明らかにするなり。『漢記』に曰く、「素絲の質を以て朱藍に附近せんと欲す」と。蓋し亦た士に就くの益多きを明らかにす。脈要精微論に曰く、「赤は白の朱を裹むが如きを欲す、赫の如きを欲せず。青は蒼壁の澤の如きを欲す、藍の如きを欲せず」と。『齊民要術』に曰く、「蓼中の蟲、豈に藍の甘きを知らんや」と。人の一方に域する、何をか以て此に異ならんや。故に河伯、北海若に謂ひて曰く、「吾、子の門に至るに非ざれば則ち殆し。吾、長く大方の家に笑はるるのみ」とは是なり。

〔校記〕

- (i) 五雅本、氷に作る。
- (ii) 五雅本、二に作る。今本『齊民要術』、三に作る。
- (iii) 五雅本、飭に作る。

〔注釈〕

- (1) 『爾雅』釈草には「葢寒漿」とある。『説文解字』一篇下・艸部に「葢馬藍」とあるので、『説文解字』の引用であらう。
- (2) 『礼記』月令。原文では「無」の字を「毋」に作る。
- (3) 『礼記注疏』月令。
- (4) 『齊民要術』種藍第五十三。
- (5) 『礼記注疏』月令。
- (6) 『詩経』小雅・魚藻之什・采緑の第一、二スタンザ。

- (7) 『荀子』勸学篇。今本『荀子』には「青取之於藍…」とある。
- (8) 今本『東漢漢記』には見えない。
- (9) 『黄帝内经素問』脈要精微論第十七。今本『素問』では「赫を「赭」に作る。
- (10) 『齊民要術』齊民要術序。この文は現存していない『仲長子昌言』からの引用文である。
- (11) 『莊子』秋水。

〔考察〕

藍はタデ科のアイ(蓼藍 *Polygonum tinctorium*) に同定される。染料であるインジゴ Indigo をとる植物はアイだけでなく、リュウキュウアイ(キツネノマゴ科) やインドキアイ(マメ科) などいくつもあるから、アイを特にタデアイと呼ぶこともある。

アイの色素インジゴチンは他の物質と化合しており、遊離させるためには発酵を必要とするため、適度な温度や湿度の条件が必要となる。『世界有用植物事典』によると日本では藍建ては夏期の作業であり、『礼記』月令の記述とは相違する。日本と中国の気候の差によるものであろうか。

アイは日本に野生する植物でなく、中国から渡来したもので、原産地はベトナム南部といわれている。日本へ入ったのは、大宝律令の賦役令に見られる点から七世紀以前であることは明らかで、国産植物染料に青系統がなかったことから、栽培は急速に普及したらしい(『朝日百科 世界の植物』p.223)。「又た其の畦、植うること鱗の如し」とあるが、現在ではインジゴは改良ハイマン法により工業的に合成されており、染料用の目的でアイを栽培することは少なくともなっていない(『岩波 理化学辞典 第四版』。(野口)

【我】

我は亦た蘼蒿と曰ふ。蘼の言為るは高なり。我、沢国漸洳の地に生ず。葉、斜蒿に似て細し。科生にして食ふべし。宿根は百草に先んず。一名、蘿蒿。一名、角蒿。『詩』に曰く、「菁菁たる者は我、彼の中阿に在り⁽¹⁾」と。阿は大陵なり。我は微草なり。言ふところは、君子の人材⁽¹⁾を長育するは猶ほ大陵の微草を長育するがごときなり。菁菁は盛んなる貌。蓋し草の初生、其の色は玄なり。盛んなれば則ち青し。霜死して後、黃落す。故に菁の文、青に从ふ。『詩』に曰く、「何の草か玄ならざる⁽²⁾」とは以て其の生を言ふ。「何の草か黄ならざる⁽³⁾」とは以て其の死を言ふなり。蓋し君子に三樂有り。而して天下に王たるは与り存せず。世は方に太平至誠にして、樂しみ賢者と之を共にするは、一樂なり。能く賢者を得て以て邦家の為に太平の基を立つは、二樂なり。天下の人才を得て之を教育するは、三樂なり。故に『詩』を序する者曰く、「南有嘉魚は賢と与にするを樂しむなり⁽⁴⁾」「南山有臺は賢を得るを樂しむなり⁽⁵⁾」「菁菁者我は材を育するを樂しむなり⁽⁶⁾」と。『爾雅』積蟲に曰く、「蚤は羅なり⁽⁷⁾」と。積草に又曰く、「我は蘿なり⁽⁸⁾」と。蓋し蛾は蠶を生ずる所以、我も亦た覆ひて之を出だす所以なり。此の義、亦た之を羅と言ふか。『字説』に曰く、「我は以て科生して俄なり⁽⁹⁾」と。『詩』に曰く、「我に匪ざれば伊れ蒿」「我に匪ざれば伊れ蔚⁽¹⁰⁾」と。我は俄にして蒿は直なり。蔚は靡にして我は細し。育材の詩、正に我を言ふ者は此を以てす。

【校記】

(i) 五雅本、才に作る。

【注釈】

- (1) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・菁菁者我の第一スタンザ。
- (2) 『詩経』小雅・魚藻之什・何草不黃の第二、第一スタンザ。
- (3) 『孟子』盡心上。
- (4) 『毛詩伝』小雅・南有嘉魚之什・南有嘉魚の毛詩序。
- (5) 『毛詩伝』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の毛詩序。
- (6) 『毛詩伝』小雅・南有嘉魚之什・菁菁者我の毛詩序。
- (7) 『爾雅』積蟲。
- (8) 『爾雅』積草。
- (9) 『字説』宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。
- (10) 『詩経』小雅・谷風之什・蓼莪の第一、二スタンザ。

【考察】

我について『毛詩名物図説』には「愚按本草又名抱娘蒿」とあり、李時珍は蘼蒿の積名に我蒿、蘿蒿、抱娘蒿を挙げてゐる。この抱娘蒿に注目したためか、『詩経植物図鑑』では我をアブラナ科のクジラグサ (播娘蒿 *Descurainia Sophia*) に同定し、播娘蒿はまた抱娘蒿と称すという。クジラグサは高さ三〇〜七〇センチメートルであり、高い草を蒿と呼ぶという説(『埤雅の研究・其五 積草篇(1)』)【蒿】には当てはまる。アブラナ科であり長さ二〜三センチメートルの長角果を結ぶことから、我の別名である角蒿の名も当てはまる。蒿と総称される植物にはキク科のヨモギ属 (*Artemisia*) やシオン

属 (*Aster*) が多く、これらの植物は葉が羽状に深裂する。クジラグサの葉も二、三回羽状に深裂するから、他の蒿の類と共通する。

『詩経名物弁解』では李時珍が『本草綱目』の蘆蒿について「似小薊」ということから、これをキツネアザミ (泥胡菜 *Hemistepta carthamoides* O. Kuntze) と考えている。キツネアザミは高さ三〇〜八〇センチメートルで葉は琴状に羽状分裂する。

角蒿という別名から、角状の実を結ぶ植物とも考えられ、上記の植物はいずれもこの条件に該当する。しかし、はつきりとした同定は困難である。(野口)

【芹】

『詩』に曰く、「鬻沸たる檻泉、言に其の芹を采る⁽¹⁾」と。芹は水菜なり。一名、水英。『爾雅』、之を楚葵⁽²⁾と謂ふ。泮宮に曰く、「泮水を采しむ、薄か其の芹を采る⁽³⁾」と。二章に曰く、「薄か其の藻を采る⁽⁴⁾」と。三章に曰く、「薄か其の苳を采る⁽⁵⁾」と。芹は香有るに取る。藻は文有るに取る。苳は味有るに取る。蓋し士の学に於けるや、其の芳臭を攪りて至るは、則ち芹を采るの譬へなり。既に至り、是に於いて文を学ぶは、則ち藻を采るの譬へなり。其の久しきに及ぶや、道の味を知り、又た嗜みて学ぶは、則ち苳を采るの譬へなり。苳は苳なり。葉は荇菜の如くして紫、莖は大なること箸の如し。柔滑にて羹にすべし。芹は潔白にて節有り。其の氣、芬芳にして、味、蓴の美に如かず。故に『列子』以為へらく、「客に、芹を献ずる者有り、郷豪取りて之を嘗め、口に蜇し、腹に慘なり」⁽⁶⁾

と。『齊民要術』に云ふ、「蓴の性は生じ易し。種うるに深淺を以て候と為す。水深ければ則ち莖肥え葉少なし。水浅ければ則ち葉多く莖瘦す。亦た水を逐つて性は滑らかなり。故に之を淳菜と謂ふ」⁽⁷⁾と。

【注釈】

- (1) 『詩経』小雅・魚藻之什・采芣の第二スタンザ。
- (2) 『爾雅』積草に「芹楚葵」とある。
- (3) 『詩経』魯頌・駟之什・泮水の第一スタンザ。
- (4) 『詩経』魯頌・駟之什・泮水の第二スタンザ。
- (5) 『詩経』魯頌・駟之什・泮水の第三スタンザ。
- (6) 『列子』楊朱第七。
- (7) 『齊民要術』養魚第六十一・種蓴。

【考察】

芹はセリ (水芹 *Oenanthe javanica*) である。ただしセリ属 (*Oenanthe*) の植物は中国に十種存在し、葉の切れ込み方により種を区別するため、これら同属植物を指す可能性もある。セリ科の植物は植物体全体に油道が発達し、芳香のある精油成分を含む。陸佃は「芹は香有るに取る」と解釈し、香りを楽しむものとし、「味、蓴の美に如かず」という。

『列子』の芹中毒の事例はドクゼリ (毒芹 *Cicuta virosa*) によるものと考えられる。同じセリ科の植物で、沼や小川のそばにはえていることから誤食しやすい。ドクゼリはシクトキシシンなどの有毒物質を含み、嘔吐、めまい、けいれんなどを起こし、命を落とすことも

ある。なお「猷序の意」とはこの『列子』の寓話に基づく。(野口)

【鞠】

『爾雅』に曰く、「鞠は治蔣」⁽¹⁾。今の秋華鞠なり。鞠舛は華有りて此に至りて窮す。故に之を鞠と謂ふ。一に曰く、鞠は金を聚むるが如く、鞠して落ちず。故に鞠と名づく。蓋し鞠は華を落とさず。蕉は葉落ちず。亦た蕉は一葉、舒なれば則ち一葉焦げて落ちず。故に之を蕉と謂ふ。月令、季秋に云ふ、「鞠は黃華有り」⁽²⁾と。有と曰ふ者は、其の有るの時に非ざるなり。『春秋伝』に曰く、「有るとは、宜しく有るべからざるなり」⁽³⁾と。『周官』に、「后蠶し、鞠衣を服す」⁽⁴⁾と。鞠衣は色黄にて鞠に象る。鞠は蓋し陰中に華さき、其の華は則ち又た中の色なり。后は内外の命婦を帥ひて蠶す。則ち天下の嬪婦をして中を取らしむ。其の服する所此の如し。王后は六服、禕翟には翟を取る。揄狄には揄を取る。鞠衣は又た諸を鞠に取る。故に鳥獸草木の名、孔子、学ぶ者の多識なるを欲す⁽⁵⁾。而して礼を記す者以為へらく、「衣服の身に在りて其の名を知らざるを罔と為すなり」⁽⁶⁾と。鄭氏、『周官』を解し以為へらく、「王后は六服、翟狄は玄、揄狄は青し、闕狄は赤し、鞠衣は黄、展衣は白し、祿衣は黒し」⁽⁷⁾と。翟狄は玄、揄狄は青し、鞠衣は黄と謂ふ所の若きは、其の説是なり。所謂闕狄は赤し、展衣は白し、祿衣は黒しと謂ふ所は、其の説非なり。『毛詩伝』を按ずるに、「展衣は丹縠を以て之を為す」⁽⁸⁾と言へば、則ち展衣は赤し。赤は則ち誠信の道有るを宣布著⁽⁹⁾。故に之を展を謂ひ、又た或は之を禮と謂ふ。『礼記』に

曰く、「内子、禮衣を以てす」⁽⁹⁾と。亦た帛に通じて禮と為す。禮は絳帛なり。此と同義なり。鞠衣は黄、展衣は赤なれば、則ち祿衣は白し。難ざる者曰く、祿衣は吉服なり。純白は婦人の吉服の宜とする所に非ず。曰く、蓋し祿衣の纁袷有るを知らず。『周官』の緑衣、是れのみ。闕狄、一名屈狄。則ち揄狄の制、屈有るを視る。刻して画かざるは、是れなり。其の色、宜しく亦た揄狄の如くなるべし。

【校記】

(i) 五雅本、著の字を箸に作る。

【注釈】

- (1) 『爾雅』 枳草
- (2) 『礼記』 月令。
- (3) 『春秋左氏伝』 桓公の正義。
- (4) 『周礼』 内司服。
- (5) 『論語』 陽貨篇に「小子よ。何ぞかの詩を学ばざる。詩は以て興すべく、以て觀るべく、以て群すべく、以て怨むべし。之を適くしては父に事え、之を遠くしては君に事う。多く鳥獸草木の名を知る」とある。
- (6) 『礼記』 少儀、身の字を躬に作る。
- (7) 『周礼』 内司服。
- (8) 『毛詩伝』 国風・邶風・君子偕老の第三スタンザの毛伝に「礼有展衣、以丹縠為衣」とある。
- (9) 『礼記』 雜記には「内子以鞠衣…」とある。

【考察】

キク (*Dendranthema grandiflora*) は中国で五〜六世紀ごろにチヨウセ

シノギク（小紅菊 *D. zawatskii* var. *laetiflora*）とハイシマカンギク（野菊 *D. inulicum*）の交配からできたと考えられ、その後大いに改良された（『日本の野生植物Ⅲ』平凡社）。従つて『爾雅』や『説文解字』の時代には品種改良されたキクは存在せず、キク属の自生種のみであったと考えられる。

キク属の植物は自然雑種も多く、種の同定が困難である。また、キク属を *Chrysanthemum* として大きくまとめる分類もあり図鑑によつて学名が異なっている。

鞠の字は革で包んだまりを意味する。花が丸くにぎつた形のため鞠と名付けられたのだろう。キク科 (Compositae) の植物は集合花があたかも一つの花のように見える頭状花序を形成する。また「鞠艸は華有りて此に至りて窮す」とあるが、鞠と窮（かがむ、ちぢむ）は古代語では音の似た同系のことばである（藤堂明保『漢和大字典』）。科名の Compositae とはラテン語で（集合花が）合成されたという意であり、一七一八年にフランスの Vaillant が命名した（『日本の野生植物Ⅲ』平凡社）。

『爾雅』、『説文解字』とも「鞠は治牆」というが、治牆とは何の植物であるか不明である。『説文解字』では鞠の別名に秋華や日精を挙げるが、治牆とは結びつけていない。段玉裁は「則治牆之非秋華亦略可見」とし、治牆と秋華鞠は別物であるとした（『説文解字注』艸部・鞠の項）。（野口）

【蒺藜】

蒺藜は地に布きて蔓生す。子に三角有りて人を刺す。状は菱の如くして小なり。蒺の言は疾なり。一名、茨。以て牆に茨すべし。故に之を茨と謂ふ。牆有茨の序に曰く、「国人、之を疾みて道ふべからず」⁽¹⁾と。正に蒺藜を言ふは此を以てす。『詩』に曰く、「牆に茨有り」⁽²⁾と。言ふところは、これを掃ひ去らんと欲すれば反て牆を傷むるなり。以て穢礙を刺るなり。『易』に曰く、「蒺藜に據る。六三、柔を以て剛に乗ず」⁽³⁾と。蒺藜に據るは、據る所に非ずして、據る者なり。今、兵家、乃ち鐵を鑄て之を為り、以て敵路を梗ぐ。亦た蒺藜と呼ぶ。『韓詩外伝』以為へらく、「春に桃李を殖え、夏に陰を其の下に得、秋に其の実を食するを得。春に蒺藜を殖え、夏に其の葉を采るを得ず、秋に其の刺を得」⁽⁴⁾と。故に君子は立つ所を慎むなり。師曠曰く、「歳は苦ならんと欲すれば、苦草先づ生ず。苦草は亭蔭なり。歳は早ならんと欲すれば、早草先づ生ず。早草は蒺藜なり」⁽⁵⁾と。

【校記】

(1) 五雅本、値に作る。

【注釈】

- (1) 『毛詩伝』 国風・邶風・牆有茨の毛詩序。
- (2) 『詩経』 国風・邶風・牆有茨。
- (3) 『周易』 困。
- (4) 『韓詩外伝』 卷七。

(3) 『齊民要術』雜説が引く『師曠占』に見える。

【考察】

蒺藜はハマビシ科のハマビシ(蒺藜 *Tribulus terrestris*) に同定される。ハマビシは一年生の草本であり、果実は外にとげがある木質の五分果に分かれる。それぞれの分果に二対のとげがあるので、全部で十本のとげがある。莖は灰白質の柔毛があり、基部で分枝し、地面をうか斜めに立ち、長さは一メートル内外である。乾燥地帯や海岸の砂地に生息し、早草と呼ばれるのもうなずける。中国各地に分布し、特に長江以北に多い。雲南には同属の大花蒺藜(*T. chinensis*)があり、ハマビシとよく似ているが、花が大きくとげの二対は大きい。(野口)

【木槿】

枳草に曰く、「椴は木槿なり、櫨は木槿なり」と。李に似、五月に始めて華さく。月令に、「木槿榮ゆ」とは、是れなり。華は葵の如くして、朝生じ、夕べ隕つ。一名、舜。蓋し瞬の義、諸を此に取るなり。『詩』に曰く、「顔は舜華の如し」と。又曰く、「顔は舜英の如し」と。顔は舜華の如しとは則ち与に久しかるべからざるを言ふ。顔は舜英の如しとは則ち愈よ与に久しかるべからず。蓋し榮えて実らざる者、之を英と謂ふ。『人物志』に曰く、「草の精秀なる者を英と為す。獸の群れを将ひる者を雄と為す。張良は是れ英なり。韓信は是れ雄なり」と。『篤論』に曰く、「日給の華、奈に似る。奈

は実にして、日給は虚なり」と。虚偽と真実とは相似たるなり。『義之法帖』に曰く、「来禽は青李、来禽は奈の属なり」と。果の美を以て禽を来たらしむるを言ふなり。

【注釈】

- (1) 『爾雅』枳草に「椴木槿木槿」とある。
- (2) 『礼記』月令。
- (3) 『詩経』国風・鄭風・有女同車の第一スタンザ。
- (4) 『詩経』国風・鄭風・有女同車の第二スタンザ。
- (5) 『人物志』英雄。
- (6) 『篤論』魏・杜恕の撰。
- (7) 義之は王羲之のこと。晋の書道家である。

【考察】

木槿はムクゲ(*Hibiscus syriacus*) に同定される。庭木としてよく植えられる、園芸品種が多くある。幹は高さ三メートル内外でよく枝分かれする。花は八、九月に開き、紅、紫、白、八重咲きなどの品種がある。『爾雅』や『埤雅』では草部にあるが、実際は木本である。

花が朝開き夕方にしぼむことから、舜という別名があるが、日本では和名としてアサガホということもある(『詩経名物弁解』)。(野口)

【莧】

莧は紅莧、白莧、紫莧の三色有り。『爾雅』に曰く、「黄は赤

「莧⁽¹⁾」と。即ち今の紅莧、是れなり。莖葉は皆高大にして見はる。故に其の字は見に従⁽¹⁾ふ。指事なり。『易』に曰く、「莧陸は夬夫たり⁽²⁾」と。莧は上六を謂ふ。蓋し兌見はる。而して又た五の剛に乗ず。柔脆、除き易きは、莧の象なり。九五の剛、尊位を得たり。大中、高大、以て平にて柔、上に生ず。莧陸の象なり。『列子』に曰く、「老非の莧と為る、老獼の猿と為る⁽³⁾」と。物、老を以ての故に變ずること、此の如き物有るを言ふ。故に易の九六を以て老と為す。蓋し老ゆれば則ち變ず。『伝』に曰く、「青泥は鼈を殺す。莧を得て復た生く⁽⁴⁾」と。人をして鼈を食らひ莧を忌むは、其れ此を以てするか。『字説』に曰く、「苗は眩を除き、莧は瞽を除き、輓は水を逐ひ、亦た蠱を逐ふ⁽⁵⁾」と。

〔校記〕

(i) 五雅本、以に作る。

〔注釈〕

- (1) 『爾雅』 積草。
 (2) 『周易』 夬。
 (3) 『列子』 天瑞第一。
 (4) 未詳。
 (5) 『字説』 宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。

〔考察〕

現代漢語では莧は雁来紅ともいい、ハゲイトウ (*Amaranthus tricolor*)

のことを指す。ハゲイトウは高さ〇・八〜一メートルで葉は長い柄を持ち紅や黄などの斑があつて美しい。ただ、ヒユ属 (*Amaranthus*) は世界に約五十種存在し、現在の中国では十三種あり外部形態も似ているので、厳密には莧はヒユ属植物としたほうが良いかもしれない。

莧は数種類の植物を指していると考えられる。『重修政和經史証類備用本草』が引く『蜀本草』によると、莧には赤莧、白莧、人莧、紫莧、五色莧、馬莧の六種類があるという。『植物名実図考』によると、五色莧は雁来紅の属で、人莧は鐵莧、馬莧は馬齒莧であるという。

馬齒莧とはスベリヒユ科のスベリヒユ (*Portulaca oleracea*) のことで、草全体が肉質で莖は分枝し地面をはって広がる。高さは一〇〜三〇センチメートル程度である。肉質の部分には水分を多く含むが、古くは水銀があると考えられていた。馬齒莧には長命草の別名があり、その由来について李時珍は乾燥に耐え、生命力が強いらからと考えた(『本草綱目』馬齒莧の積名)。神仙流の医家は馬齒莧の種子を長寿の薬として用いた。現代中医学でもこれを清熱解毒薬として用いる。

ヒユ属植物のうちハリゲイトウや繁穂莧 (*A. paniculatus*)、アオゲイトウ (反枝莧 *A. retroflex*) などが、同じヒユ科の植物であるノゲイトウ (青箱 *Celosia argentea*) の代用として薬に用いられている(『新編中薬志』)。(野口)

【茹蘆】

『爾雅』に曰く、「茹蘆は茅蒐⁽¹⁾」と。蓋し茹蘆は一名茅蒐。其の葉は棘に似、以て絳を染むべし。『説文』に曰く、「人血の生ずる所⁽²⁾と。故に蒐、艸に从ひ鬼に从ふ。齊人、之を茜と謂ふ。陶隱居以為へらく、「東方の諸処、乃ち有りて少なし。西の多きに如かず⁽³⁾」と。夫れ文は西草を茜と為す。其れ或は又た此を以てせんか。『詩』に曰く、「東門の墀、茹蘆、阪に在り⁽⁴⁾」と。言ふところは、男女の際、礼を以てすれば則ち近くして易きこと、東門の墀の如し。色を以てすれば則ち遠くして険しきこと、茹蘆、阪に在るが如し。又曰く、「縞衣茹蘆、聊か与に娛しむべし⁽⁵⁾」と。茹蘆は茅蒐の女服を染むるなり。言ふところは、国人の喪多くして室家の吉服以て相保つを得んことを思ふなり。蓋し縞衣は物にして麻に非ざるを言ふ。茹蘆は色にして素に非ざるを言ふ。吉服を明らかにす。『周官』に「庶氏、蠱毒を除くを掌る。嘉草を以て之を攻む⁽⁶⁾」。嘉草は茜の類の如き是れなり。『春秋伝』に曰く、「皿蟲を蠱と為す⁽⁷⁾」と。篆隸、以て皿器と為す。蟲は諸虫なり。『指事律説』に、「蠱毒を造畜するは諸虫を集合するを謂ふ。一器の内に置き、久しく相食み、諸虫皆な尽く。若し独り蛇在らば、即ち蛇蠱の類と為す⁽⁸⁾」と。故に其の字、指事なること此の如し。『伝』に曰く、「千畝の梔茜、千畦の葦蕪、其の人皆な千戸侯と等し⁽⁹⁾」と。然らば則ち梔茜の利、博しと謂ふべし。此れ小人の圃を学ぶ所以なり。

【注釈】

- (1) 『爾雅』 積草。
- (2) 『説文解字』 一篇下・艸部。
- (3) 『重修政和經史証類備用本草』 草部上品之下・茜根。
- (4) 『詩経』 国風・東門之墀の第一スタンザ。
- (5) 『詩経』 国風・鄭風・出其東門の第二スタンザ。
- (6) 『周礼』 庶氏。今本『周礼』では「毒蠱」に作る。
- (7) 『春秋左氏伝』 昭公・伝元年。
- (8) 未詳。
- (9) 『史記』 貨殖列伝。

【考察】

茹蘆はアカネ(茜草 *Rubia cordifolia*) などのアカネ属 (*Rubia*) の植物を指すと考えられる。現在、中国にはアカネ属は十一種五変種が存在する(『新編中薬志』)。これらは近縁関係にあり、非常に似通っている。アカネは多年生の植物で、茎は方形で細い逆刺があり、他の植物などに寄りかかるのに適している。八月から十月に円錐状の花序に、径三・五×四ミリメートルの淡黄色の花を咲かす。

根は太くひげ状で空気にさらすと黄赤色になる。『説文解字』の「人血の生ずる所」とはこのことを指しているのだろうか。本草書には止血作用などの記載があるが、単にシンボリズムだけでなく、実験的にも証明されてきている。プルプリンなどを色素成分に含み、染料として用いられていたが、現在では化学合成により製造されている。

また、セイヨウアカネ(洋茜草、新疆茜草 *Rubia tinctorum*) の根から「アカネ色素」を製造し食品添加物として用いられていたが、腎

臟への発ガン性が疑われ、添加物名簿から削除されることとなつた。(野口)

【臺】

臺は夫湏なり。夫湏は莎草なり。以て笠と為すべし。又た以て蓑⁽¹⁾と為すべし。疏にして温無し。故に莎は沙に从ふ。内司服の所謂沙と同意。『詩』に曰く、「臺笠緇撮⁽¹⁾」と。又曰く、「南山に臺有り、北山に萊有り⁽²⁾」「南山に桑有り、北山に楊有り⁽³⁾」「南山に杞有り、北山に李有り⁽⁴⁾」「南山に栲有り、北山に柎有り⁽⁵⁾」と。山は君の象なり。南は以て明君に象り、北は以て暗君に象る。蓋し太平の君子は至誠なり。賢者と之を与にすることを樂しむ。是れ賢と与にするの道と為すのみ。未だ以て之を得ること有らず。未だ以て之を得ること有らざれば則ち、道合すれば則ち服従し、合はざれば則ち去る。惟だ其の子孫、昏乱有りと雖も、而して先君の旧臣、之を去るに忍びずして、以て自ら先王に獻ずる者、此れ賢を得るの道なり。故に此に南山を言ひ、又た北山を言ふ。萊は食ふべし。桑は衣るべし。臺は覆ふべし。楊は載すべし。賢者の類なり。臺萊は草なり。其の生ずるや物の下に在り。其の成るや物の先に在り。基有るの象なり。故に曰く、「樂しきかな君子、邦家の基⁽⁶⁾」と。草を養ひ以て木を致し、小を養ひて以て大を致す。鬱たる彼の楊、沃若の桑、以て山に貢する有るに至れば、則ち光有るの象なり。故に曰く、「樂しきかな君子、邦家の光⁽⁷⁾」と。基は安ずる所以なり。光は榮える所以なり。孟子曰く、「堯は舜を得ざるを以て己が憂ひと為し、舜は

禹・皋陶を得ざるを以て己が憂ひと為す⁽⁸⁾」と。此れ其の大を言ふ者なり。小は臺萊を遺さず、大は桑楊を棄てず。杞李の若きは猶ほ収むる所に在り。此れ其の悉すを言ふ者なり。桑楊の山に於けるは大なりと雖も高きこと能はず。堅なりと雖も久しくすること能はず。賢を得るの盛は栲柎⁽⁹⁾の高大なるが若し。不朽を以て山と成れば則ち至れり。故に南山に於いて杞有り、栲有りといひ、北山に於いて李有り、柎有りと曰ふなり。李は果とすべく、杞は茹とすべく、養の道有り。故に曰く、「民の父母⁽⁹⁾」と。柎は弓幹と為すべく、栲は車輻と為すべし。久の道有り。故に曰く、「遐ぞ眉寿ならざらん⁽¹⁰⁾」と。且つ臺は覆ふべく、桑は衣るべきは、以て庇下の臣に象る。杞は茹とすべきは、以て養下の臣に象る。栲は以て車輻と為すべきは、以て任重の臣に象る。故に之を南山に言ふ。此れ明君の頼りて以て治むる所の者なり。萊は食ふべく、楊⁽¹¹⁾は載すべきは、以て濟難の臣に象る。李は果とすべきは、以て賓客を治むるの臣に象る。柎は弓幹と為すべきは、以て軍旅を治むるの臣に象る。孔子曰く、「衛靈公の道無き、仲叔圉、賓客を治め、祝鮀、宗廟を治め、王孫賈、軍旅を治む。奚ぞ其れ喪はんや⁽¹¹⁾」と。此れ、北山に萊有り、楊有り、李有りの意なり。「德音已ます⁽¹²⁾」とは、継ぐ有るを言ふなり。「德音是れ茂し⁽¹³⁾」とは、承有るを言ふなり。「爾の後を保艾す⁽¹⁴⁾」とは又た燕、子孫に及ぶを言ふなり。其の寿を称すること其の上の如きは、猶ほ以て未だ足らずと為すなり。更に以て其の徳を言ふ。其の今を称すること其の上の如きは、猶ほ以て未だ足らずと為

すなり。更に以て其の後を言ふ。夫れ寿考の福筭、無期に至り、境、無疆に至る者、又た特に之を頌願するのみに非ず。蓋し古へは道有るの賢、事を省して以て君の心を清らかにし、物を備へて以て君の體に適ふ。心清ければ則ち浄を生じ、體適へば則ち樂を生ず。此れ君の寿なる所以なり。故に初め曰く、「萬寿期無し」と。次に曰く、「萬寿疆り無し」と。君、其の臣を遇するや、何ぞ独り然らざらんや。言ふところは諫を聴き膏澤に従ひて、民に下し、其をして優に之を為さしめ禍患に迫らざる者、此れ寿の道なり。故に始めに曰く、「遐ぞ眉寿ならざらんや」と。終わりに曰く、「遐ぞ黄ならざらんや」と。

〔校記〕

- (i) 五雅本、篋に作る。
- (ii) 五雅本、梗に作る。
- (iii) 四庫全書本、舟に作る。今、五雅本に従う。

〔注釈〕

- (1) 『詩経』小雅・魚藻之什・都人士の第二スタンザ。
- (2) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第一スタンザ。
- (3) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第二スタンザ。
- (4) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第三スタンザ。
- (5) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第四スタンザ。
- (6) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第一スタンザ。
- (7) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第二スタンザ。
- (8) 『孟子』滕文公章句。

- (9) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第三スタンザ。
- (10) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第四スタンザ。
- (11) 『論語』憲問。
- (12) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第三スタンザ。
- (13) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第四スタンザ。
- (14) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第五スタンザ。
- (15) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第一スタンザ。
- (16) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第二スタンザ。
- (17) 『詩経』小雅・南有嘉魚之什・南山有臺の第五スタンザ。

〔考察〕

『詩経植物図鑑』では臺の植物の代表例としてカヤツリグサ科のカサスゲ (*Carex amphifolia* Boott subsp. *dispatata*) を挙げている。『詩経植物図鑑』も指摘するように、スゲ属 (*Carex*) は中国で四百種以上あり、各形質の間に一貫した関連性が乏しいため分類が困難である。また、『詩経名物弁解』ではハマスゲ (香附子 *Cyperus rotundus*) の可能性も指摘していて、スゲ属だけではなくカヤツリグサ科の多種の植物を指している可能性がある。

カサスゲは多年生の草本で沼沢水辺に群生し、高さは一メートル程度、地下茎は横にはう。紫褐色の鞘状葉を乾燥させて、笠や雨衣を作る。

『詩経』の中でも「南山有臺」は植物が多く登場する詩で、その数は十種に及ぶ。それぞれ植物がペアになっていて、『埤雅』ではそれぞれの意味について解釈している。臺菜のペアでは「臺菜は草なり。其の生ずるや物の下に在り。其の成るや物の先に在り。基有るの象なり」といずれも草本であることに注目している。(野口)

【艾】

『爾雅』に曰く、「艾は冰⁽¹⁾臺⁽¹⁾」と。其の字、又に従ふ。草の以て病を又すべき者なり。一名、灸草。『詩』に曰く、「彼に蕭を采る。一日見ざれば、三秋の如し」。「彼に艾を采る。一日見ざれば、三歳の如し」と。蕭は祭りを共する所以、艾は疾を療する所以、以て将むる所ますます大なれば、其の懼讒ますます甚だしきを言ふなり。曲礼に曰く、「十年を幼と曰ひ、学⁽³⁾ぶ」と。幼なる者は十年の名、学は其の事なり。「二十を弱と曰ひ、冠⁽³⁾す」弱なる者は二十の名、冠は其の事なり。「三十を壮と曰ひ、室⁽³⁾有り」壮なる者は三十の名、室有る者は其の事なり。「四十を強と曰ひ、仕⁽³⁾ふ」強なる者は四十の名、仕は其の事なり。壮は幼に反するの詞、強は弱に反するの詞。壮は則ち能く立つ。強は則ち能く行く。蓋し能く立つ所有りて、然るに後に行く。能く行く所有りて、然るに後に能く歴す。能く歴する所有りて、然るに後に能く至る。故に「五十を艾と曰ひ、六十を耆と曰ふ」⁽³⁾艾は歴なり。耆は至なり。夫れ幼を以ての故に学ぶ。弱を以て故に冠す。壯を以ての故に室有り。凡そ此れ皆な子の道なり。其の十年に及びて、徳又た一進するなり。則ち苟も此を知るに非ず、又た能く之を行へば、則ち是に於いて出でて仕ふ。故に曰く、「強にして仕⁽⁴⁾ふ」と。仕は士なり。其の徳又た十年にて一進すれば、則ち以て大夫と為るべし。故に「艾、官政を服す」⁽⁵⁾と曰ふ。内則に曰く、「五十は命じて大夫と為し、官政を服す」⁽⁶⁾と。其の徳又た十年にて一進すれば、則ち以て卿と為るべし。故に曰く、

「耆にして指使す」⁽⁷⁾と。卿は人を指使する者なり。且つ歴して之に至る。然る後に、以て指して之を使ふべし。其の徳又た十年にて一進すれば、則ち以て公と為すべし。故に曰く、「七十を老と曰ひて伝ふ」⁽⁸⁾と。周官に、三公、之を「卿老」⁽⁹⁾と謂ふ。既に老いて、則ち又た十年にして耄なり。既に耄にして、則ち又た十年にして耄なり。故に八十は耄と曰ひ、九十を耄と曰ふ。耆は艾の至り。耄は老の至り。夫れ文、老至を耄と為すは、此の如きのみ。耄は僭忘なり。『春秋伝』に曰く、「老、将に知⁽¹¹⁾らんとして、耄、之に及ぶ」⁽¹⁰⁾と。百年は則ち人の大期、是に在るなり。当に養を致すべきのみ。故に百年を期頤と曰ふ。『博物志』に曰く、「冰を削りて圓ならしめ、挙げて以て日に向け、艾を以て其の影を承くれば則ち火を得」⁽¹¹⁾と。艾を冰臺と曰ふは其れ此を以てするか。旧説に、燕磨は艾を惡むと。『字説』に曰く、「艾、疾を又むべし。久しくして彌よ善し」⁽¹²⁾と。故に『爾雅』に曰く、艾は長し、「艾は歴なり」⁽¹³⁾と。妄は又災を以て名と為す。艾は又疾を以て義と為す。皆歴する所長く、関する所衆きを以ての故なり。医は艾灸を用ふ。一灼、之を一壯と謂ふ者は、人を壯にするを以て法と為す。其れ若干の壯と言ふは、人を壯にすること当に此の数に依るべきを謂ふ。老幼羸弱は力を量りて之を減す。

【校記】

(i) 五雅本、冰の字を氷に作る。(ii) 五雅本、知の字を至に作る。今本『春秋左氏伝』は知に作る。

【注釈】

- (1) 『爾雅』 枳草。
- (2) 『詩經』 國風・王風・采芣の第二スタンザ。
- (3) 『礼記』 曲礼。
- (4) 『礼記』 曲礼。
- (5) 『礼記』 曲礼。
- (6) 『礼記』 内則。
- (7) 『礼記』 曲礼。
- (8) 『礼記』 曲礼。
- (9) 『周礼』 地官司徒に「郷老」の字句が見える。
- (10) 『春秋左氏伝』 昭公元年。
- (11) 『博物志』 卷二。
- (12) 宋・王安石の著。すでに散逸して伝わらない。
- (13) 『爾雅』 釈詁下。

【考察】

ヨモギ属 (*Arenaria*) は世界に二五〇種から四〇〇種あるといわれ、日本にも三〇種ほどある。北半球の暖帯から寒帯に多く生息し、南アメリカやアフリカ南部にまで分布する。ヨモギ属は花が大きくて花粉にとげが発達した虫媒花のキク属が、虫の少ない乾燥地帯に進出して風媒花になったグループと考えられており、乾いた草地や岩場に多く、湿地や森の中では見かけない (『朝日百科 植物の世界』)。

和名であるヨモギが多くのヨモギ属の植物を指すように、艾もまたいくつかのヨモギ属の植物を指していると考えられ、一種に特定することはできない。

艾は病を癒す植物である。艾葉を生薬名として薬とするが、日本

薬局方外生薬規格ではヨモギ (*Arenaria princeps*) とオオヨモギ (*A. montana*) を、『中華人民共和国薬典』では *A. argyi* (中国名、艾) を艾葉の起源植物と規定している。中国では *A. argyi* 以外に合計二十三種のヨモギ属植物の葉が艾葉の市場品に用いられたり混入したりしている (『新編中薬志』)。このことからわかるようにこれらの植物は形状・成分とも似ているため、『詩經』の時代に区別していたかどうか疑わしい。ただヨモギ属の植物でもカワラヨモギ (茵陳蒿 *capillaris*) は神農本草経の上品に記載され、名医別録に記載された艾葉とは区別されている。茵陳蒿と艾葉の形状・薬効の違いを古くから区別していたわけである。

灸に使うもぐさはヨモギの葉の裏にあるT字状の綿毛を乾燥させた物である。『孟子』離婁篇に「七年之病、求三年之艾」とあるように、長く乾燥させた物はよく燃えるため良品とされる。

艾は刈と同音であり、「かる」の意味を持つ。また「反乱や賊を平らげて世の中を安らかにする」という意味も持つ (藤堂明保編『漢和大事典』)。中国では五月五日にヨモギの人形を門に掛け邪気が入るのを防ぎ (『荆楚歲時記』)、インドやチベットでも魔よけの香に用いる。(野口)

【鶮】

小草、五色にして綬に似る。故に綬草と名づく。『詩』に曰く、「邛に旨鶮有り」と。言ふところは、文采の具備有らんことを欲して、以て條理を成すの臣、鶮の如き者、之を戕賊せずして、而る後

に焉を得。或は曰く、「鵯は綬鳥なり」⁽²⁾と。故に鵯⁽ⁱ⁾は雑色有りて綬に似る。其の字、鵯に从ふ。積草に曰く、「鵯は綬なり」⁽³⁾と。是の詩始めに、「防に鵯巢有り」⁽⁴⁾と曰ふ者は、驚懼せざるを以ての故に、防に鵯巢有るなり。卒に、「邛に旨鵯有り」⁽¹⁾と曰ふ者は、之を戕賊せざるを以ての故に、邛に旨鵯有るなり。且つ鵯は善く其の地を相して巢を累ぬ。安らかなれば則ち其の功用を致し、驚懼の憂ひ有れば則ち累ねざるなり。鵯は善く其の天に相して綬を吐く。楽しければ則ち其の文采を見、戕賊の疑ひ有らば則ち吐かざるなり。『伝』に曰く、「虞氏の恩、動植を被ふ」⁽⁵⁾と。故に烏鵯の巢、俯して窺ふべし。今、綬鳥の大なること鵯鵯の如し。頭頰、雉に似、時有りて物を吐く。長さ数寸、食は必ず嚙に蓄へ、臆前大なること斗の如し。其の嚙に触れるを慮り、行くに毎に草本を遠ざく。『古今註』に云ふ、「吐綬鳥、一名功曹」⁽⁶⁾と。今俗に之を錦囊と謂ふ。蓋し鵯の性、多く懼る。利に就きて害を違る。『莊子』の所謂、瞿鵯子⁽⁷⁾なる者は義、諸を此に取る。故に曰く、「吾れ諸を夫子に聞けり。聖人務めに従事せず。利に就かず、害を違⁽ⁱⁱ⁾らず」⁽⁸⁾と。周書に又た意而子なる者有り。意而は燕なり。鵯と反す。蓋し燕は諸人の間を襲ひ、猜懼する所無し。故に道を許由に問ふ。而して許由曰く、堯既已に汝を黥するに仁義を以てし、汝を剋るに是非を以てす。汝將に何を以て夫の遙蕩恣睢伝徒の塗に遊ばんとするか、と。⁽⁹⁾

〔校記〕

(i) 五雅本、鵯に作る。(ii) 五雅本、遠に作る。今本『莊子』は違に作る。

〔注釈〕

- (1) 『詩経』 国風・陳風・防有鵯巢の第二スタンザ。
- (2) 『毛詩』 国風・陳風・防有鵯巢の毛伝には「鵯は綬草なり」とある。
- (3) 『爾雅』 積草。
- (4) 『詩経』 国風・陳風・防有鵯巢の第一スタンザ。
- (5) 未詳。
- (6) 『古今註』 鳥獸。
- (7) 瞿鵯子は『莊子』の齊物論(内篇)、馬蹄(外篇)に登場する。
- (8) 『莊子』 齊物論。
- (9) 『莊子』 大宗師(内篇)に見える意而子と許由の問答である。

〔考察〕

鵯はラン科のネジバナ(モジズリ *Spiranthes sinensis*) に同定される。現代漢語では綬草という。ネジバナは海拔の低い草原などに生える多年草で高さ一五〜三〇センチメートル、葉は三〜一〇ミリメートルと細く根生する。花序は偏側性でいちじるしくねじれる。花は桃紅色またはまれに白色、緑色である。

『莊子』にはしばしば変わった名前前の人物が登場するが、陸佃はここで挙げられた瞿鵯子、意而子はそれぞれ鵯、燕(意而)にちなむという。『埤雅』 積鳥では燕の別名として玄鳥と『莊子』 山木篇の「鵯鵯」を挙げている(『埤雅の研究・其三 積鳥篇(3)』)。(野口)